

・ チエルノブイリ通信

発行 チエルノブイリ支援運動・九州 事務局
連絡先 北九州市八幡東区春の町1-3-7 日開荘2号
Tel·Fax 093(681)1780

1993年1月9日
No.

42

口座番号 01770-1-65328

加入者名 チエルノブイリ支援運動・九州

講師 宮 谷 昭
すげ の や あさら
まやか



チエルノブイリ支援運動・九州10周年企画

菅谷医師・リュドミラさん講演会を
九州各地で行います
(くわしくは本文と同封チラシで)

リュドミラ・ウクラインカ

通信42号をお届けします

明けましておめでとうございます。いかがおすごしでしょうか？ チエルノブイリ支援運動・九州は、昨年まで4回のストーリン地区での検診を行うことができました。特に、昨年11月の第4回検診団の派遣時には甲状腺疾患のシンポジウムが開かれ、ペラルーシ各地から多くの医者がつめかけて武市先生、深田先生に多くの熱心な質問が寄せられました。

(くわしくは、本文にて。)

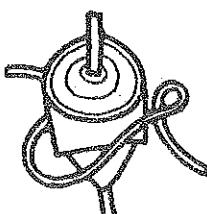
移動検診をはじめて2年、支援運動・九州には多くの信頼と期待が寄せられています。今年も、会員おひとりひとりに支えられながらスタッフ一同がんばっていきますので、よろしくお願ひします。

それから、2月には総会があります。どうぞ、ふるってご参加ください。

【今回の内容】

- 第4回検診団報告
- グリシコビッチ村のリューダ来日
- 菅谷先生・リュドミラさん講演会
- 国際交流エッセイ入選作
- 事務局より
- 総会の案内

……となっています。



「「移動検診車導入」による
早期診断・治療システム』

第4回検診団報告

派遣期間

1998年10月23日～11月2日

検診団メンバー

- ・武市 宣雄（医師・広島甲状腺クリニック院長）
- ・深田 修司（医師・甲状腺専門、限病院内科部長）
- ・小林 恵美（臨床検査技師・大阪府立看護大学助手）
- ・山田 英雄（ロシア語医療通訳、支援運動・九州 顧問）
- ・菊川 嘉司（ロシア語通訳、支援運動・九州 顧問）
- ・河上 雅夫（支援運動・九州 運営委員）

支援機器・医薬品（価格）

超音波診断装置	2,310,000円
検査器具（日本で購入）	67,612円
医薬品	604,200円
検査器具・検査試薬・医薬品	
（現地調達分）	2,313,920円
雪だるま号維持費	211,125円
現地検査費用	42,225円

帰国後検査費用	169,870円
菅谷基金へ（菅谷先生へ手渡し）	135,750円

* その他のくわしい会計報告は総会時
に行います。

行動記録

- 10/23 関西国際空港発
 - ・ フランクフルト泊
- 10/24 ミンスク着
 - ・ 打ち合わせ
 - ・ 菅谷先生と会食
- 10/25 ・ 打ち合わせ、調査
- 10/26 ・ 医学向上研究所訪問
- 10/27 甲状腺疾患シンポジウム
- 10/28 ストーリン地区へ
- 10/29 検診
- 10/30 検診
- 10/31 ミンスク発フランクフルト泊
- 11/ 1 フランクフルト発
- 11/ 2 関西国際空港着

第4回移動検診レポート

Chernobyl Support Movement, Kyushu
Operation Director: KAWASAKI Masao

私たちが97年から取り組んでいる移動検診車による「早期診断・治療システム」プログラムも、今回で第4回となった。これまで3回の検診の経験を生かしながら、さらにペラルーシの医療技術の向上のために有効な支援が行えたと考え

ている。

今回の検診は、基本的には今までと同様の内容をプレスト州ストーリン地区病院で実施してきたのだが、新たな試み・経験もあった。

その第一は外務省からの補助金を受けることができたということである。私たちの運動はこれまで一般市民からの基金・カンパによって成り立っているが、今回外務省からの資金が得られたことは経済的にも有利だが、これまでの移動検診活動を公的に評価されたということの意義は大きい。昨年まで郵政省のポランティア預金を何度も申請しながら、結局は代表が郵政省職員（郵便局員）という理由で助成がもらえなかつたことを考えれば、その感激もひとしおである。

第二はミンスクまでのルートをフランクフルト経由としたことである。これまですべてモスクワ経由だったが、前回までの報告にあるように、モスクワ税関で必ずといっていいほど足止めをくらっていたのである。日本から必要な書類を揃えていったにもかかわらず、医薬品や支援物資に対して多額の税金を要求される。カタログハウスモスクワ事務所の協力や袖の下を使って切り抜けてきたが、毎回言うことが違うし、せっかくの支援物資を没収でもされてしまっては元も子もない。今回はルフトハンザドイツ航空でのフランクフルト経由となつた。

第三にはミンスクでシンポジウム（セミナー）が開催されたことである。10月4日、事前の打ち合わせのために検診団メンバーが広島に集まつた時点では、シンポジウム開催日はミンスク到着の翌日の25日となっており、内容も内輪の関係者が集まるだけと思っていた。

ところが、出発直前になって27日開催が決定したとの連絡が入り、さらに政府主催でおこなうという保健大臣の命令書まで発行されていることがわかった。それによると、ベラルーシ全国の大学、研究所、地区病院から内分泌医を一堂に集めることになっていた。支援運動・九州としては、ミンスク第一病院（国立甲状腺ガンセンター）に勤務してある菅谷先生にも出席してもらおうとファックスを送ったのだが、それが一波乱を起こすことになる。

菅谷昭先生、リュドミラさんと食事

いつのまにか、セミナーの話が大きくなっていたことに驚いたが、一番大変だったのは事前に予定していた講演内容を教育的分野に大幅に変更することになった武市先生と深田先生である。

幸い、ミンスク到着後に2日間の余裕があったので、二人にはその間にスライドの整理と原稿の書き直しをしてもらうことになった。

ミンスク到着の24日夜、菅谷先生との会食となった。この席で、菅谷先生はセミナーには出席できないこと、もしこのような企画を考えるのなら自分や第一病院のデミチク教授に相談してほしかったと強く言られた。この背景には第一病院と今回のセミナーの会場となる第十病院との関係があるようだ。ベラルーシでは甲状腺ガンの手術はすべて第一病院でおこなわれており、その第一人者がデミチク教授である。そのベラルーシで「甲状腺疾患」セミナーを開催するのにデミチク教授に相談がないのはおかしいということである。しかもそのセミナーには

甲状腺ガンについての項目がないので第一病院から出席する必要はないということである。

この菅谷先生の心配に我々は大変驚いたが、その後は和やかに来年の講演旅行について話し合った。

ブイソフ親子と会う

25日早朝、95年と96年に支援運動・九州の招待で来日したピクトル・ブイソフ君と父親に会った。（株）有機コーヒーの中村さんからのことづけを手渡すためである。待ち合わせ場所はホテル・アクチャブリ。ブイソフ親子は午前6時過ぎにホテルの前まで来て待っていたそうである。ところが、ここは大統領府のすぐそばであり、警察官の職務質問を受けたという。また、彼らの住むモギリヨフからミンスクまで列車で7時間かかるということ、帰りの便は夕方まで無いので、結局、車中2泊しないと往復できないのだ。この国の交通事情を垣間見たような気がした。

午後にはセミナーの準備で忙しい武市先生を残して市場へ出かけた。日本で想像していたより大規模で、品物も豊富だ。ベラルーシ訪問は3度目だが、これまで市場を見ていないので簡単には比較できないが、以前より豊かになっているような気がする。経済状況は悪くなっているはずなのに、そういうことをあまり感じないのはどうしてだろうか。

ガン以外の甲状腺疾患は 第十病院で治療

この日の夜、アレクセイ・ロマノフス

キー医師の家に招待された。アレクセイさんはロマノフスキイ・ペラルーシ赤十字社社長の息子で、我々の移動検診のよき理解者であり協力者である。彼がいなければこの移動検診はスムーズに進まなかつたと思われる。我々の支援活動でもっとも大事なのは、相手の国でいかに良いパートナーを見つけるかということである。その点、アレクセイさんとラリサさんという人物に出会えたのは支援運動にとって幸運なことである。

昨夜の菅谷先生の心配を伝えると、まったく問題ないという。以下はアレクセイさんとラリサさんの話をまとめたものである。

“今回は専門家のためのセミナーではなく教育的なものであって、集まるのは内分泌医であり、内科を中心とした臨床医である。他の病院と競争するという性格のものではない。甲状腺ガンという言葉を使うと第一人者であるデミチク教授を刺激すると思うが、今回のプログラムにはガンという言葉は一切使われていない。ラリサさんとデミチク教授の息子のユーリーさんとは非常に仲がいい。”

“ミンスク郊外に位置しているアキサコフシナは以前は共産党幹部の保養施設だったが、ソ連崩壊後 Chernobyl 被害者のための病院となった。それが今まで政府の役人によって取り上げられようとしている。ここに援助をしてもいずれ無くなってしまうかもしれない。” “旧ソ連時代には医者の再教育機関がしっかりしていたが、今はそれがなくなろうとしている。医者の躰にばらつきがあるのでその底上げをする必要がある。”

“我々がストーリンで検診ができたのはペラルーシ赤十字を通じてやってきた

からで、保健局を通じてやっていたらまだ現地に入ることはできなかつただろう。”

“甲状腺ガンの手術は全て第一病院で行われているが、その他の甲状腺疾患の治療は第十病院で行われている。後遺症が出た場合は、その患者は第十病院にくることになる。そこで第十病院の医者は手術の内容に無関心ではいられない。せめて、日本では手術しないような良性腫瘍の患者に対して無駄な手術をしないように、吸引穿刺による検診を地方の病院でもできるようにしていく必要がある”

第十病院で

「甲状腺セミナー」開催

26日はラリサさんの所属している再教育センター（医学向上研究所）を訪ねた。

入口横に新刊書のコーナーがあったので、いろいろと物色してみる。赤十字代表部のロマノフスキイ社長を訪ねたあと、明日のセミナー会場でもある第十病院へ向かう。第十病院では悪性腫瘍以外の甲状腺疾患の治療をおこなっている。良性の甲状腺疾患として年間150例の手術を行っている。甲状腺ガンの手術を受けた人も後遺症の治療などで第十病院に来るが、そのうち5%が悪性腫瘍として必要のない手術がされている。

武市先生とラリサ・ダニーロバ医師の間で翌日の講演内容について打ち合わせした後、アキサコフシナ病院へ向かった。ここは私にとって93年の第3次調査団として訪問して以来である。今回の訪問目的にはアキサコフシナ病院のサナトリウム支援という項目があったのだが、こ

これまでの話からアキサコフシナ病院の存続が国の状況により不安定なものになっている。そのために支援物資としてエコー（超音波診断装置）を持ってきていたが、これをどこに渡すかが問題となる。

前回の支援物資である計測機「IMX（ホルモン分析機）」に支援運動から寄贈したという印のステッカーを貼って、今回訪問の記録をとった。

27日はいよいよセミナー当日である。ここが今回訪問の前半の山場となる。保健大臣の命令という形で全国の内分泌医が召集されたというが、会場の第十病院の講義室には実際に150人以上の聴衆が集まつたようだ。日本側の講演者である武市先生と深田先生は英語でスピーチし、それをラリサさんがロシア語に翻訳するという形で進められた。主にスライドを使っての講演であり、全国の内科医に吸引穿刺の重要性を訴えるというような教育的内容となった。

講演の合間に、支援運動からのエコーの贈呈式をおこなった。予定ではアキサコフシナ病院に対する支援だったが、前に書いたような状況から、アキサコフシナに置いてくるのは問題があった。そこで、第十病院に一時預けるという形で贈呈し、アキサコフシナ病院の名前で受取書を作つてもらうことにした。全国の医師が集まつた場での贈呈は、支援運動の存在価値を大いにアピールしたに違ひない。

また、会場に在ペラルーシの夏井代理大使が見えられて一言挨拶された。今回は連絡が遅れたので、大使の日程調整ができず充分な話ができなかつたが、次回はぜひゆっくり会いましょうとのことだった。

講演の後には、会場から多くの質問が出て、聴衆の関心の高さをうかがわせた。内科医ということもあってか、深田先生への質問が多かったように感じた。スライドプロジェクターが数度にわたつてトラブルなど、はらはらする場面もあったが、この反応を見ればセミナーは成功したといえるだろう。

個人的なことだが、以前から親しくしていた前ペラルーシ駐日大使のサエンコフ氏（現在、ペラルーシ最大のプリオール銀行副頭取）がホテルまで会いに来てくれた。わずかな時間だが、旧交を暖めることができた。彼は、95年の子ども達の作文集「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」を書いた子供たちが来日した際、大使館の初めての仕事として子供たちとともに首相官邸を訪問した。それ以来、たびたび会う機会があつたが、今年4月に大使の任を終了して帰国していたのである。

ストーリンでの移動検診

今回の日程の中ほどにセミナーが設定されていたために、ストーリン地区での検診日数が少なくなつてしまつた。ミンスクからストーリンまで、雪だるま号で飛ばしても5時間くらいかかる距離である。結局、28日8時過ぎにミンスクを出発して、午後2時にストーリンに到着した。

我々の検診になぜストーリン地区を選んだかについて、アレクセイ医師に確認した。それによると、ストーリン地区はキリスト教のバプテスト派の多い地区であり、その宗教的理由から大家族が多く、ペラルーシでもっとも子供の比率の多い

地区ということで選んだという。

今回、検診に使用したのは内分泌科として新築された建物で、3階の1室を採血に、1室を触診とエコー、吸引穿刺の部屋として使った。我々が到着した時点ですでに十数人の方が検診に訪れていた。

甲状腺の診断では、まず触診をして、次いでエコー（超音波による画像診断）で調べ、異常があれば吸引穿刺をおこなうという流れだ。今回は、最初にエコーによる検査をおこない、場合によっては吸引穿刺をして、最後に触診という流れとなった。吸引穿刺というのは、注射針で首を刺して甲状腺の細胞を取り、検査する方法である。腫瘍が良性であるか悪性であるか判断するには、細胞を調べる必要があるが、ペラルーシではミンスク第一病院に行かなければ吸引穿刺は行なわれていない。

これは、地方の病院では細胞を検査するための機材もなければ、その技術もないというところに原因がある。また、地方には若い医者が少なく、新しい技術・知識を覚えるという状況ではないようである。そこで、基幹病院の若い医者がまず新しい技術を覚え、その医者が地方へ行き、地方病院との共同作業をすることによってそこの医者のレベルアップを図るのが良い。我々の移動検診の大きな目的の一つは、ペラルーシの医療技術の向上に対する効果的な援助をおこなうことである。その意味で、今回ペラルーシの医師として初めて、地方病院における吸引穿刺をアレクセイ・ロマノフスキイ医師が実施できたことは大きな成果である。

移動検診は研修の場

今回の移動検診は実質2日間という短いものになったが、その間に52人の検診をおこなえたのは、地元の医師が事前に検診を受ける人を選別していたためである。その中には、他の検診で甲状腺腫瘍を発見され、第一病院で全摘出手術を受けた人がいた。ところが、それは摘出する必要の無いものであるうえに、その手術で取り残しがあったのである。また、前回の検診から自ら私たちの検診に参加している国際赤十字検診団のアルトル医師、タチアナ・スエタ医師が積極的にエコー操作をしていたのが印象的である。彼らは自分自身の担当する患者をつれてきて検診に参加するなど、積極的に技術を覚えようとしている。支援運動では交通費を支払うことによって彼らの努力に報いることにした。

今回から、検査に必要な器材で現地調達できるものは現地で揃えることになっていたが、実際には到着した時点では必要なものが揃っていなかった。何とか機材を揃え検診を行うことができたが、ドイツ製と日本製を比べると、微妙な点で日本製のほうが使いやすいということがわかった。これらの点は素人にはよくわからないので、次回からは検査技師がチェックする必要がある。

雪だるま号は10人乗りのハイルーフバンだが、今回の日本からのメンバーは6人、それにミンスクからラリサさん、アレクセイさん、若い医者のジーマ君、検査技師の女性、運転手を含めると定員をオーバーしてしまう。それに各自の荷物を加えるとどうしても2台の車が必要だ。そこで、赤十字から同じような車を

1台チャーターしてストーリンに向かった。どちらも赤十字のマークと回転灯をつけた。日本でいえば救急車のようなものである。移動検診車というと、車内に検査装置を備えた大型のバスをイメージするが、ペラルーシで必要なのは医者の移動手段としての車と持ち運び可能な検査装置である。雪だるま号がその条件を満たしているのは間違いないが、日本からの移動検診の場合にはさらにもう一台必要になるのである。

今回はストーリン地区病院に患者を集めての検診となり、学校検診という支援運動の以前からの計画は実行されなかつた。これについてはいろいろ意見があると思うが、ペラルーシの国内事情を考えてみる必要があるようだ。日本国内で決めたことがそのまま実行できないこともあるのである。将来は学校検診も行なえるようにするにしても、現時点ではその状況になっていないと考える。

チェルノブイリ原発事故に関する情報は、IAEA（国際原子力機関）、WHO（世界保健機構）を中心に管理したいというのが当局の考え方である。そこに民間団体が検診を行なって、情報が勝手に流出することは好まれない。我々がペラルーシ赤十字と協力して検診を行なっているため、WHO関連の書類が作成できるので検診ができると考えている。

ストーリンでの3日目は、地区病院の内分泌科医師と、ラリサさん、アレクセイを交えての、患者たちの検査内容の検討である。地区病院では、患者に対して今後の治療のためにも、本人に検査結果を知らせる必要がある。我々がデータを持って帰ってしまっては、その後の対応ができないのである。一人一人、カルテ

をチェックしながら患者の状況を話し合つた。ミンスクまでの距離があるので時間が気になつたが、10時過ぎにはすべての予定を終了してストーリンを出発した。

支援運動・九州に対して感謝状

ペラルーシ最後の夜はラリサ宅でお別れ会となつた。ラリサさんはご主人と大学生の息子との3人暮らしである。アパートへ行ってまず驚いたのは、その蔵書の量である。部屋の壁いっぱいに専門書が並べてあり、天井近くまで本で埋まつていた。この席で、チェルノブイリ支援運動・九州に対して、医学向上研究所所長からの感謝状をいただいた。チェルノブイリ原発事故の犠牲者への人道的支援と日本一ペラルーシ共催の「甲状腺疾患」セミナーの開催に対して協力したということがその理由である。さらに、武市先生と深田先生に対しては、セミナーでの講演の証明書が発行された。

来年以降の検診に向けて

ペラルーシ最終日の31日、ドイツ・シマツの代理店であるペロリット社との打ち合わせを行なつた。(注)今回の検診のための器材が揃つていなかつたのは、日本からの送金が確認できていなかつたこと、器材を名前で注文してもその規格がわからず、どの製品を準備すれば良いのかわからなかつたということである。そこで、ドイツシマツのカタログを1冊もらって、次回からはその番号で注文することにした。

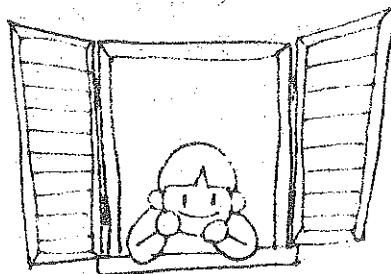
アキサコフシナとストーリン地区病院への支援として、ペロリット社で試薬を

購入し、それによって自分たちで検診できるようにした。いくら検査機械を支援しても、試薬類が無ければ宝の持ち腐れとなってしまう。検査機械や器材は日本から持っていくが、安くて良いものがあるが、試薬類は現地調達したほうが良いというのが今回の検診ではっきりした。

今回は検診した人数こそ少なかったものの、医療技術の向上という点では、ミンスクでのセミナーの開催と、ペラルーシ医師の地方病院での吸引穿刺の実施という大きな成果が上がった。これは、 Chernobyl 事故の被害者を少しでも支援していくという私たちの目的に適うものである。さらに、国際赤十字検診団の医師が我々の検診に参加するなどの広がりも見せていている。そして、外務省の補助金が支給されたことと、ペラルーシ保健省、赤十字との協力関係を考えれば、

単なる民間団体の枠を越えた活動となってきた。来年以降は、さらにこの移動検診が発展的に継続することが重要である。

(注) ベロリット社は、ドイツシマズの子会社なので、送金はドイツシマズの銀行口座経由にしていたが、ドイツシマズ側の担当者が交代したため互いの連絡不十分や、こちらの確認不足などがあり、お金はドイツシマズの銀行に留まっていたままになっていた。その後、お金はベロリット社の手に渡り、医療機器・医薬品も入手できた。



Chernobyl Support Movement · Kyushu 10th Anniversary Event Lyudmila Chupchik came to Japan

Chernobyl Support Movement · Kyushu设立10周年イベントとしてグリシコビッチ村のリューダ（リュドミラ・チュプチクさん）が11月2日～13日に来日しました。リュドミラさんは、Chernobyl 原子力発電所事故で被害を受けた子どもたちの作文集「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」の著者のひとりで、1995年の夏に来日しています。また、1996年のスタディツアーや、リュドミラさんの住むグリシコビッチ村を一

行が訪れ、ホームステイをしました。

今回の来日は、運営委員の沢村さんが、文通をしているミンスク市在住のタマ

ラさんとリューダの先生であるグリシコビッチ村のニーナさんを個人で招待したことにより、リュドミラさんを支援運動・九州で招待して一緒に来てもらって、各地で講演・交流をしようということになり、実現したものです。

講演、交流は、下関市（1998年11月3日）、大分市・中津市（11月5日）、

北九州市（11月7日）、東京（11月12日）に行われました。

リューダ日本へ やって来る

チェルノブイリ支援運動・九州
協力スタッフ

寺嶋 悠

2年ぶりに会うリューダは、背が伸びて前よりずっと大人びて見えた。素敵女性に成長していた。訪ねて來た私を玄関まで出迎えてくれ、ほほに再会のキスをしてくれた。

リューダが日本へ來ると事務局の方から聞いてから、ずっとその日を心待ちにしていた。ペラルーシで話し尽くせなかつことがたくさん残ったままだった。ロシア語ができるだけたくさん覚えて備えた。私は2年前のスタディーツアーに参加したメンバーの一人で、グルーシコピッチ村ではリューダの家に2泊もお世話になっていた。今回の日程の中に、無理をお願いして、私の家に1泊だけ泊まってもらえるようにして頂いたのは、その時、アヒルやニワトリの鳴き声の中、朝もやに包まれ曉をむかえて以来の、2年越しの私の夢でもあった。「夕食は何にしよう。ワインや熟かんも飲むのかな。家族や大切な友達も紹介したい。散歩やドライブもいいし、博物館もいいかもしれない。・・・」と、平凡な頭からはいつになくいろんなアイデアが浮かんだ。ロシア語ができるだけたくさん覚えて、到着を待っていた。

ニーナさんは一つにまとめた黒い髪の似合う落ち着いた方。タマーラさんはグレイのショートで明るく知的な方だった。沢村さんの家の居間で、「ここにちは。初めまして。寺嶋悠です」と順番に挨拶すると、「初めまして、リューダと言います」とリューダもおどけて自己紹介した。懐かしい澄んだソプラノの声だった。

その日は山口の秋芳洞へ行った。ちょうど紅葉が色づき始めた頃で、しっとりと苔むした木々や冷たく透きとおった小川に、3人とも「クラシーヴィ(きれい)」をため息と共にもらしていた。国の重要文化財にも指定されている長州大内氏の氏寺、瑠璃光寺も訪れた。五重塔についての案内板を、私がたどたどしくも貧しい英語で説明すると、英語も話されるタマーラさんは、一言一言丁寧に、ロシア語でニーナさんとリューダへ伝えてくれるのだった。

11月7日（土）には、事務局のスタッフさんや同じ2年前のツアーに参加した友達が集まって、20人くらいでささやかな交流会を開いた。即興のサックスやロシアのポップスが流れ、バーベキューとお酒に酔いしれた人々は、ペラルーシのお別れ会の時にもやつた、懐かしいダンスのゲームではしゃいだ。夜が深まる頃にはみんなふらふらになっていた。夕食後部屋に入り、ペラルーシ側と日本側でお互いに改めて自己紹介した。いろいろ話す中で、リューダ達が、「この中にはペラルーシへも来たことのある人がたくさんいますが、どのような感想を持ったのか知りたい」と言った。私達は、12年前のチェルノブイリの事故のこと、出発前のイメージ、ペラルーシの美

しく豊かな森、始めて見た地平線、ウォッカ、そこで暮らすすてきな心を持つ人々の思い出を語った。心に引っかかっていたことも、やっと伝えられたと思った。

リューダは今、首都ミンスクにある大学の予科コースで勉強している。休みの日に実家に帰るくらいで、あとは寮での生活になる。「町での生活に憧れませんか」という問い合わせには、いつも「ニエート(いいえ)」と首を振る。「グルーシコピッチ村は私の故郷。私の帰るところはいつもここだと思っています。」と言うリューダの表情は、自分を作っているのも演じているのでもないと思う。

その夜はユースホステルに宿泊した。皿倉山の中腹にあり、リューダと私たちの部屋からは市内の夜景を一望できた。一緒にツアーに行った現在大学1年の自由理(しゅり)ちゃんと、事務局の深江さんの娘さんで小学生のともよちゃんも同じ部屋だった。4人で写真やプリクラを見せ合った後は、ペランダから黙って夜景を眺めた。

翌日は私の町を案内し、ペラルシの3人と自由理ちゃん、それにスタッフの中村隆市さんも駆けつけてくれ、一緒に夕食を囲んだ。おじさんたちはビールにお酒を、私たちはワインを片手に、今ではすっかりお馴染みの、「カンペーイ！」とグラスを合わせた。その夜は12時をまわるまで歌とゲームが終わらなかった。

夜の最後に、中村さんが、どこからともなく小さな緑のキャンドルを取り出した。それがあんまり不思議だったので、みんな「彼はサンタクロースではないのか」と驚いた。「実はそうなんです」と中村さんは笑った。その夜を一緒に過ご

した人の数だけ、8つのキャンドルに火をともすと、中村さんはサンタクロースになりきって話し出した。

「今日、私たちはこうして出会い、そして楽しい時をともに過ごしました。このすてきな夜のことはきっと忘れないでしょう。もうすぐ私たちは皆、離ればなれになってしまいます。これは魔法のナカムラキャンドルです。皆さん、このキャンドルを自分の家に持ち帰り、クリスマスの夜に、またこうして火をともして下さい。遠く、みんな離れてしまうけど、その夜だけは、そうやって同じ時を過ごしましょう。」

8つの炎の向こうにはリューダがいて、タマーラさんが訳し終わると、「スペシーパ(ありがとう)」とゆっくり微笑んだ。

11月13日。リューダたち3人は、さわやかな思い出を残して無事帰国の途についた。

私の机の上には、その時のキャンドルが間もないクリスマスを待っている。チェルノブイリの事故のことは、もう決して他人事ではなくなった。それがきっかけで、たくさんの人と出会えたかと思うと、いつも少し複雑な気持ちになる。いまだにうまく整理がつかないままだが、ただ、その出会いをずっと大切にしたいという気持ちだけは真実だと思っている。

この通信を多くの会員の方が読まれていることと思います。皆さんはチェルノブイリのこと、そこで暮らすリューダたちのこと、それに「チェルノブイリ支援運動・九州」の活動について、どのように思われてますか。もしお時間の都合が

つくのならば、是非2月の総会に足を運ばれて下さい。そして一緒にお話をできたら、と思います。これは私たちのメッセージです。

一通訳の見た交流

チェルノブイリ支援運動九州

運営委員・ロシア語通訳

山口英文

タマーラさん、ニーナさん、そしてリューダ。私たちの国でもどこにでも居るようなごく普通の人が日本にやって来た。それも、支援運動の一人のメンバーの方との友情がきっかけで。人口数千人の片田舎の学校の先生と、その教え子、そして私立の英語学校の先生のタマーラさん。そんなプロフィールだ。チェルノブイリ事故がなければ、彼らは多分日本に来ることもなかっただろう。そして、2年前のスタディツアーや人々もリューダとニーナさんの住むグルーシコビッチ村はおろかベラルーシと言う国すらも行くことがなかった筈である。

「ベラルーシという国は一度も内戦、侵略、紛争を起こしたことの無い国です。スラブ民族の中で一番温和で優しい民族と言われています。日本人も優しいおとなしい人々で親近感を感じます。」とニーナさんは言った。私もロシア人よりはベラルーシ人と日本人は仲良くなりやすいように思える。といってロシア人が悪いというのでは無い。ベラルーシ人が底

抜けにお人好しに見える程、人懐こいのだろうか。素朴な人達である。

第三回移動検診の時に、ベラルーシ共和国の独立記念日に偶、居合わせた。花火が上がるというので眠いのを我慢していた。「フョードル（私のロシア名である。）、お前、花火見たことあるか。すごいぞ。きれいだぞ。俺も楽しみにしていた。今日は家族と一緒にみるよ。必ず見ろよ。」と言われた。ロシア語を習いはじめて初めての散文文学が「サリュート（祝日の日の号砲—花火の意）」だった。懐かしいあの頃、文字の上でしか触れられなかった人々の気持ちに、今日触れられる。しかし、期待通り、この花火ときたら日本では不発気味の規模のもの。隅田川で上がるやうのなら「ナンデュー。しきてやがら、ざけんじゃねえ」というようなモノが壮烈な音だけを発して、中天とは程遠い、ビルの7階程のあがると菊花どころか枝垂れ柳でも無く、猫やナギくらいの規模でペロンと落ちていく。しかも、お寺の庭で古竹を風呂炊きにつかって爆ぜているような間隔でポンという音が散発する。しかし深夜に集まつた人々はその度に歓声を挙げてやんやの大喝采である。しかし楽しそうだ。このくらい呑氣で優しいのがベラルーシの人々とでも言えようか。

私は下関、大分、中津、北九州での通訳を担当した。通訳というのは人の発言をどこまで正確に伝達するのかが本分である。出来れば各表現に出るニュアンスまでどんぴしゃりと伝えたい。正確に伝わりお互いの感情が高まって言葉も要らずに手を握り合う姿を見たときは通訳してよかったです。反対に紛糾の場合でも冷静に正確に伝えると、仕事自体が失

敗しても通訳のせいにされる事も無い。大抵、「お前の通訳が悪い。」と言われる時はクライアントが余程、でたらめか通訳がうそ通訳をしていた時。ニュアンスどころか。大体の意味すらも上手く伝えられず、1人称、2人称、3人称と訳がごてごてして誰がどう発言しているかも判らなくなる。おまけに大概日本人の中高年は先と後で言っていることが矛盾してくる。親玉の日本政府発言もそうだ。仕方がないかも知れない。でも、こうなると大変、話している露面のロシア人が目を回して来る。ヒグマが蜂を追いかねててんてこ舞いして森中大騒ぎになるという方が、ぴったしの通訳の顛末だ。勿論、私もこの経験を多分に踏んだから良く分かる。

支援運動の性格からして「交渉決裂を覚悟に」という事はまず無いのが幸いだ。下関ではタマーラさんとニーナさん、そしてリューダが、多分多くの参加者が初めて触れる迫力と素晴らしいエネルギーッシュなベラルーシの雰囲気を見てくれた。多分、厳しい経済、気候、そして放射能事故の中からこんな明るい元気な人々に触れることは下関の参加者には驚きだったのではないだろうか。つくづくこの人々を招くきっかけを作った沢村ご夫妻と娘さん夫婦の尽力に通訳できてよかったです。2年前に娘さんをスタディーツアーに送り出した西野さんや多くの方が、まるで旧知のように語らうのを見て、人の心と心の語らいに、私はつくづく関心した。

大分、中津、北九州ではリューダが弱冠17歳で見事に大任を果たした。多くの人々を前に「本当に、私たちの事を思ってくれてありがとう。私たちも日本の

人々を本当の友と思えます。」と対等に、ただ、暗く辛い事故のイメージよりも、健気なベラルーシの人々の気持ちと明るさを代表しているような姿だった。皆の質問にも立派に受け答え、決して卑屈にもならないし、事実を覆い隠そうともしない。心に溢れる故郷グルーシコビチ村への気持ち。ベラルーシという祖国への愛情。日本ではもう、訳が分からなくなつた本当の郷土愛とその延長にある善良な愛国心が溢れた彼女の真心だったのか。

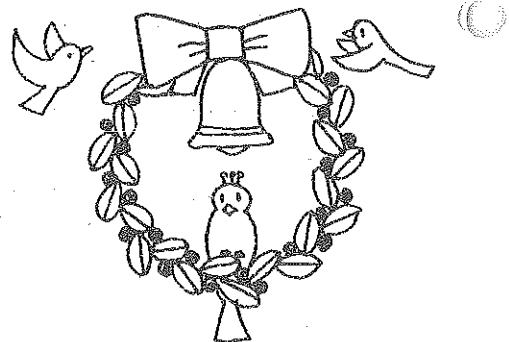
Chernobyl 原発炉心部の放射能の主たるものであるプルトニウムの半減期が約2万5千年と言われている。人類は途方もない事をした。誰が2万5千年も管理できるだろう。生贊のようなベラルーシの人々には Chernobyl 事故が既に生活の中で常識として居座っているようだ。 Chernobyl 事故と後遺症の中で生まれ、育ち、生きていく。でも誰かが放射能障害で苦しみ、死んでいく。ベラルーシの人々には生活の中で常識として、病気の一部のように居座ってしまった。最近は中央アジア、シベリア、北極地帯にも核実験やその他の放射能による被害の後遺症が出現して来た。 Chernobyl の何十倍もという事も出現しているらしい。もうあの国では、ただ自分に当たらないように息を潜めていくしか無いのか。しかし、日本に来るとベラルーシの軋が異常だと彼等自身の目でも分かる。日本では皆、薬も、食べ物もある。なんせ、冬に蜜柑というビタミン食が腹一杯食える国である。ベラルーシで冬に蜜柑は夢だとリューダが溜息をついた。原爆から50年、日本は富に富んだ。実は不自由しているのは人の心だが10日

位の滞在で善男善女とばかり会っている。日本の問題はどこまで知りえるだろう。

なぜか、中津ではペラルーシの友人が来ることが小楠小学校の先生、曹洞宗の僧侶達の影響もあっていささか過熱氣味に大歓迎である。ちょっとしたスターのようにも見える。特に小学生が真剣に聞くし、会えること、話すことに大喜びする。実を言うとニーナさんは、嬉しくもあつたが同時にペラルーシの現状、そしてこれからを思うと苦しかったようである。何を話してもただ原発被害を訴えて物乞いキャラバンをしているように感じていた。当然である。10年以上も同じ題材でしか交流の接点が生まれない。ニーナさんは私に密かに「何を話したらよいの。何が聞きたいの。もう沢山でしょう。」と訴えた。リューダのように純真に人の出会いに喜んでいるだけではなかった。彼女も帰国すれば小楠小と同じくらいの規模の小学校のベテラン教師である。恵まれた元気な日本の子供のエールはよろこんで受け取れるが、故国の現状を見れば見るほど何を今後ペラルーシに築くべきが分からなくなつたようであった。当然、一通訳の私がそんな事をアドバイスできる筈もない。「皆が会えて喜んでいます。何でも聞きたいこと、話したいことを言ってください。通訳しましょう。」といつも答えるだけだった。彼女の苦惱は結局、自身も誰も答えられぬままであった。

寺島さんや多くの青年達が今、リューダと次の日に会えること。そして次の日に会うときには今日の出会いが出発となる希望を書いている。語っている。沢村

さんご夫妻を初めとする下関の人達もきっと一期一会の気持ちで遠いペラルーシから招いた友達に最高の歓待をしてあげたと思う。次にはあのペラルーシの3人の友人の近い人の誰かが放射能障害に病むかも知れないのだ。この厳しさは笑顔の下に事実として横たわっている。でも、原発事故が出発点ではあるが、今は、人と人の出会いを互いに思っている。忘れる事無く語り継がれるだろう。変わること無く100年も200年も続く友情になるだろう。「肩を寄せ合って夜景を黙ってみた。」「クリスマスに互いに思いを寄せてキャンドルを灯そう。」「息弾ませてポルカを踊ってみた。皆でプラトークの踊りで抱き合って再会と出会いを噛みしめた。」そうして触れ合った心の思いはきっと素敵な思い出として次の世代に続くだろう。この人達が担う時代はきっとお互いに信じ合う平和な世の中をつくるだろう。そこには通訳はもう要らないだろう。



・ チェルノブイリ支援運動・九州10周年企画

菅谷昭先生、リュドミラさんの 講演会を行います

今回の通信にチラシを同封していますように、チェルノブイリ支援運動・九州10周年企画として、ペラルーシで医療活動を行っている菅谷昭（すげのやあきら）先生と、大学院で医療心理学を学び、自らチェルノブイリ原発事故によって甲状腺ガンの手術を受けたリュドミラ・ウクラインカさんの講演会を行います。菅谷先生については、以前NHKでドキュメンタリー番組が放送されたので、ご覧になっている方も多いと思います。チェルノブイリ支援運動・九州でも、医療検診で現地へ訪れる度にお会いして、菅谷先生の医療活動に対してカンパを行っています。

ペラルーシの現在の医療の現状と今後の支援のあり方についてだけではなく、菅谷先生とリュドミラさんを通して自分自身の生き方について考える機会となるでしょう。

ぜひお聞き逃しの無いように、お近くの会場まで足を運んでください。

*各地の日程は以下のようになっています。場所等がまだ未定の場所もありますので、参加をする場合は連絡先へご一報ください。

☆大分市

日 時: 1月27日(水)午後7時~

会 場: 大分コンパル(予定)

参加費: 1,000円

連絡先: 河野 近子

(tel/fax 0977-23-6334)

* 医療関係者中心の学習会です。一般の人も参加できますが、その点を御了承ください。

☆宮崎県日向市

日 時: 1月28日(木)午後7時~

会 場: 日向市文化交流センター

(tel 0982-54-6111)

参加費: 未定

連絡先: 小森 寿子

(tel/fax 0982-21-7291)

☆山口県下関市

日 時: 1月30日(土)午後2時~

会場名: 下関市労働教育センター(予定)

(tel 0832-23-4585)

参加費: 500円

連絡先: 沢村 和世

(tel/fax 0832-23-9061)

★山口市

日 時: 1月31日(日)午後2時~
会場名: 山口ふるさと総合伝承センター
(tel 0839-28-3333)
参加費: 1,000円
連絡先: ウィンドファーム(矢野)
(tel 093-202-0081)

(fax 0952-32-2978)

★福岡市

日 時: 2月1日(月)午後1時~
会場名: 明光寺(博多区吉塚)
(tel 092-621-2698)
参加費: 1,000円
連絡先: 崇禪寺(甲斐)
(tel 0979-32-3373)
安全寺
(tel/fax 0979-22-1787)

★熊本市

日 時: 2月3日(水)午後1時~3時
会場: 熊本市産業文化会館
(tel 096-325-2311)
参加費: 500円
連絡先: 中川 光子
(tel/fax 0965-35-7333)

★北九州市

日 時: 2月4日(木)午後6時半~
会場名: 北九州市女性センター“ムーブ”
(tel 093-583-3939)
参加費: 1,000円
連絡先: チエルノブイリ支援運動・九州
事務所
(tel/fax 093-681-1780)

★佐賀市

日 時: 2月2日(火)午後10時~
会場: 勤労者福祉社会館
(佐賀市神野東)
(tel 0952-32-2802)
参加費: 無料
連絡先: グリーンコープ生活協同組合さが
組合員事務局 桑野
(tel 0952-32-2801)

*各地へのお問い合わせに関しては、チ
エルノブイリ支援運動・九州事務所で
も受け付けています。



事務員募集

チエルノブイリ支援運動・九州では、事務局で働いてくださる方を募集し
ます。北九州市八幡東区春の町のチエルノブイリ支援運動・九州事務所まで
通うことのできること、ワープロまたはパソコンが少しでもできることができることが
条件となります。時給制です。勤務時間、その他条件など委細面談にて。お問
い合わせは、支援運動・九州 事務局 (tel/fax 093-681-1780) まで。

北九州国際交流エッセイコンクール

入賞作品より

北九州市の国際交流団体が中心となり、国際交流エッセイの募集がありました。たくさんの応募の中、運営委員の矢野宏和さんのものが入選しました。入賞作品(12編)は、12月21日北九州女性センター「ムーブ」にて、朗読グループによる朗読＆コンサートという形で発表されました。

以下はその矢野さんの作品を掲載します。

国際交流エッセイ

「風吹く夕暮れの畑から」

～チエルノブイリ

スタディツアーより～

矢野 宏和(28歳)

夕暮れの風のなか、畑の草を抜く作業の手を休め、茜に染まった空を見上げる。土の感触を指に感じながら、ふと、かの地の食卓と菜園を思い浮かべる。

1996年8月、ベラルーシ共和国、グリシコビッチ村。私はこの村に住むグリーシャの家に2日間滞在させてもらった。午後7時、村に到着したとき、チエルノブイリ原発から放出された放射能に汚染されたこの村で食事をすることに、私はためらいを感じていた。

その2日前、私は放射能汚染により居住不可能になった村を訪れていた。人影は全くなく、ほとんどの家は盗賊により荒らされ廃墟となっていた。床板は碎かれ、空っぽの地下室が見える。散乱するガラスの破片。引きだしは抜き取られ、ひっくり返されているタンス。

だが、私の関心は、家の内部より外部に向けられた。光に満ち、生命力に溢れているのである。時季は夏、街路をトンネルのように覆うプラタナスの葉。道脇で風に揺れるコスモス。どの家屋も菜園に囲まれ、リンゴやスモモの樹が植えられている。目溜まりの畑には、雑草が生い茂っているが、2、3時間の手入れで十分に野菜を作れる状態になるだろう。

放射能は目にも見えず匂いもないから、なぜここが居住不可能なのか、その理由が実感できない。その分、より一層、放射能の恐怖を肌身に感じる。一刻も早くその場から立ち去りたかった。

そうして私は逃げるようにグリシコビッチ村に来たのだった。奥さんのガリーナと次男のミーシャが迎えに来てくれた。日本人と合うことなど初めてなのだろう。緊張を覆い隠すように、精一杯の笑顔で出迎えてくれた。

ガリーナの自宅へと案内される。すぐに菜園の上に触れてみた。浜辺の砂のような粒子の土壤には、トマト、キャベツ、インゲン、とうもろこし、ピーマンが作

付けされ、周辺を鶏が草を啄みながらうろついていた。家畜小屋には、二匹の山羊と四匹の豚。犬が突然の来訪者に驚いて吠えてたる。菜園と果樹と木造の家と、それらはまさしく土に根差した自給的な生活空間だった。

夕食の食卓には、トマトとキュウリのサラダ。じゃがいもと卵と小麦粉で練られたドーナツ。キノコのソテーにチェリーのジュース。母ガリーナが家の周りで収穫した食べ物を素材に、精一杯の手間をかけて作った料理が並ぶ。野菜を刻み、飲み物を注ぐ。私をもてなすために食卓の上で目まぐるしく動くガリーナの手に、私は魅かれた。放射能への怯えが、その手から発する温かさに包まれ消えていく。

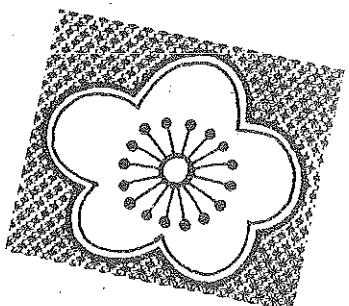
二人の息子のうち次男のミーシャ（九歳）は心臓が悪い。放射能との因果関係は定かではないが、放射能の不安はいつも感じているという。が、ガリーナは「それは仕方のこと」と一瞬うつむきながらもきっぱり言い切った。その言葉には「放射能のことはよく分からぬけれど、私はこの子たちを育て抜きます」という意志が感じ取れた。自分で栽培した野菜を最大限の手間をかけて料理し、子どもを育てる。放射能に対しても、一歩たりとも退かず怖けない母親という存在の強さを、食卓を守る母ガリーナの姿に見ることができた。スープの湯気に震む食卓の温かい雰囲気に身を委ねながら、「ああ、これで自分は生きていける」と、私はそんな想いを抱いた。

日本に戻り、私はすぐに草に覆われて土も見えない荒れ地を借りた。ようやく草を刈り終えて、しばらく通わないでい

ると、もう草が生い茂っていて、また草刈りが再開しなければならない。一年を過ぎても畠を作ることできず、したがって作物を植えることもできなかった。

もしも私にあの出会いがなければ、実際に自分の畠を作る行為までに至らなかつただろうし、いつまでたっても作物を収穫できない自分にたいして簡単に見切りをつけていただろう。だが、作物を収穫することよりも、別な目的があつて私は畠に向かっていた。畠で草や土と格闘する合間に、グリシコピッチ村の菜園と食卓のイメージが鮮明に想い浮かび、母ガリーナの優しさに触れることができるのだ。いつしか畠での作業が、私の生活には欠かせないものになっていた。

今、畠には可憐なニンジンの葉が風に揺れている。私も風に吹かれながら、「このニンジンをガリーナに届けられればな」と、祈りにも似た想いを込めて空を仰いでいる。



事務局より

- * 每号振込用紙を入れています。これは、事務作業の手間を省くためと、思い立った時にいつでも振り込めるように毎回入れて欲しいという要望があったからです。すでに振り込まれた方には申し訳ありませんが、不要な場合は各自で処分をお願いします。
- * 振込用紙で書籍の注文もできます。「わたしたちの涙で雪 だるまが溶けた」「ペラルーシの旅」など、まだお読みでない方はどうぞご注文ください。
- * 募金等の領収書につきましては、必要な方のみ発行させていただくことになります。振替用紙の中の要・不要の所に○印をつけてください。
領収書は特に希望がなければ次に送る通信に同封します。お急ぎの場合は御一筆ください。
- * 振込用紙が届き、事務処理をするまで1~2週間かかります。書籍や領収書など特にお急ぎのものがありましたら、あらかじめ電話かFAXでご連絡ください。
わからないことがありましたら、事務局まで連絡をお願いします。不在時には留守電にメッセージを入れたら事務局員に転送されるようになっています。折り返しこちらからお電話をしますので、必ずお名前と電話番号をメッセージに入れてください。

有機無農薬コーヒーのご案内

マイルド（有機栽培の特徴）で飲みやすいコーヒーです。また、1パックにつき50円が Chernobyl 支援運動・九州を通じて Chernobyl 原発事故の被害に苦しむ子どもたちへの医療援助資金となります。

● コーヒー価格（アルミパックで200g入り、送料込み） ●

有機無農薬ジャカランダ	（5個以上）	1個当たり	775円
スペシャルジャカランダ	（5個以上）	1個当たり	970円

・税抜き価格です。注文個数に応じて割り引きがあり。有機無農薬紅茶もあります。

* 販売に協力してくださる方（個人・団体）、店頭に置いてくださるお店などを募集中。

ご注文・問い合わせ

〒807-0052 福岡県遠賀郡水巻町下二西3-7-16 (株) ウィンドファーム
フリーダイヤル 0120-803-678 / FAX 093-201-8398

チェルノブイリ支援運動・九州 第9回 総会のお知らせ

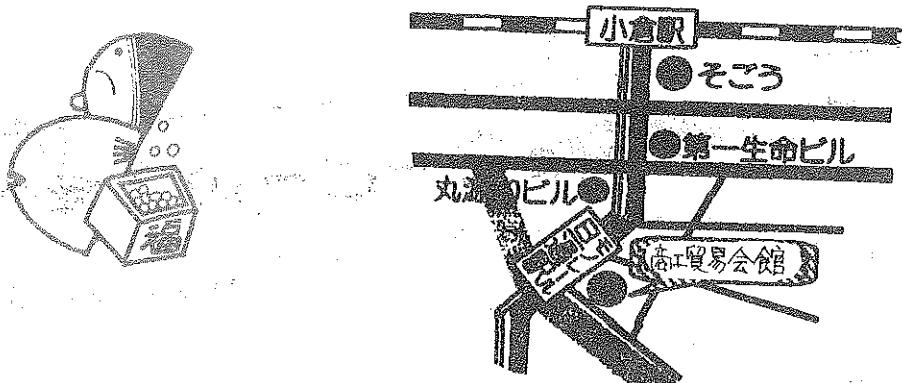
チェルノブイリ支援運動・九州の総会の時期がやってきました。支援運動の運営委員と会員さん達が顔を合わせることのできる貴重な場です。総会に出席して、思っていること・提案・アイデアなどをぜひお聞かせください。

とき： 2月7日（日）午後2～4時半

ところ： 北九州市立商工貿易会館

（北九州市小倉北区古船場1-35 小倉駅より徒歩10分

Tel 093-541-2184）



* チェルノブイリ支援運動・九州の活動に興味があるかたなら、どなたでも参加できます。参加費は無料。

みなさん、ふるってご参加ください！